uicc-Japan
Japan National Committee for UICC

国際対がん連合
Unio Internationalis Contra Cancrum
Union for International Cancer Control

UICC-ARO
UICC ASIA REGIONAL OFFICE

UICC日本委員会 ニュースレター
Japan National Committee for UICC

No. 27
July, 2022

事務局 公益財団法人がん研究会　がん研究所
〒135-8550 東京都江東区有明3-8-31
Tel:03-3570-0542　Fax:03-3570-0546
uiccjapan@jfcr.or.jp

ごあいさつ

UICC日本委員会委員長
野田　哲生

この度、UICC日本委員会ニュースレター№27を発行することとなりましたので、一言ご挨拶申し上げます。

2021年から2022年にかけては、依然として新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が全世界で猛威を振るい、UICC日本委員会（以下、当委員会）の活動も多くの制限を受けることとなりましたが、そのような困難な状況下においても多くの方々からのご支援・ご協力を頂きながら活動を行って参りました。

その中でも当委員会に於ける一大イベントでもあります毎年2月4日のワールドキャンサーデーイベントですが、今年2022年の2月4日はライトアップイベントやライブセッションを開催致しました。

今年はUICC本部が定めた新しい3年間のキャンペーン「Close the Care Gap!」（がん医療のギャップを埋めよう）の最初の年に当たります。UICCは、がん治療における公平性が損なわれている現状を認識し、医療へのアクセスにおいて多くの人々に存在する障壁とこれらの障壁がどのような影響を社会に与えているのかを改めて捉え直すことを目指しています。当委員会では、コロナ禍ということもあり、完全オンラインによるライトアップ点灯式「ライトアップ　ザ　ワールド　Close the care gap－未来にひかりをつなぐ」の開催並びに2月4日限定配信のライブセッション（2テーマ）、オンデマンド配信によるワールドキャンサーデーセッション（9テーマ）を実施致しました。

ライトアップ実施に当たりましては、当委員会メンバーや有志の皆様から手を挙げて頂き、全国で計15か所のライトアップを実現することができました。

前年に引き続き、今回も特設サイト（URL　https://worldcancerday.jp/）を活用する他、FacebookやTwitterなどSNSを用いたキャンペーンも展開しまし

た。特設サイト内ではYouTube動画による点灯式のLive配信、その前後の時間帯にはZoomウェビナーによる限定配信ライブセッション、オンデマンドによるワールドキャンサーデーセッションの公開を行うなど、盛りだくさんのコンテンツを多くの人々に視聴して頂ける環境を整備することができました。このライトアップイベントの模様やワールドキャンサーデーセッション等は、特設サイトから現在もご覧頂けますので、是非、皆様アクセスしてみて下さい。

今年もコロナ禍という がん医療にとって極めて過酷で困難な状況の中ではありましたが、お陰様を持ちまして、ライトアップ点灯式並びにライブセッションの配信、ワールドキャンサーデーセッションの公開を行うことができました。これもひとえに皆様方のご支援とご協力の賜物と心より御礼申し上げます。

末筆ではございますが、当委員会の名誉会員でありました 赤座 英之先生が昨年12月1日にご逝去されました。赤座先生に於かれましては、2000年に日本癌治療学会のメンバー会員としてご就任頂いた後、当委員会幹事並びにUICC-ARO Directorとして長きに亘り、ご尽力を賜りました。当委員会への多大なる貢献に感謝申し上げますとともに、ここに黙祷を捧げ、お悔やみ申し上げます。

以上

CONTENTS

挨拶	野田 哲生	1
ワールドキャンサーデー		3
ライトアップ ザ ワールド		6
ライブセッション		7
ワールドキャンサーデーセッション		8
事前告知・報道・事後掲載		10
UICC 世界での活動		14
2022年ワールドキャンサーデーに参加して	中島　仁司	15
誰一人取り残さない医療を目指す北海道のピンクリボン	割野　雄太	16
SDM (Shared Decision Making)をがん治療選択のムーヴメントに！	穂積　重紀	17
2022 ワールドキャンサーデーに参加して	神田　浩明	18
コロナにも寒さにも負けず～ワールドキャンサーデー2022点灯式報告～	宮崎　龍彦	19
2022年ワールドキャンサーデーに参加して	藤　也寸志	20
セッション「悪液質治療をがん治療医の道具箱に入れるには」に参加して	坂野　哲平	21
オンデマンドセッション−UHCの観点から見た日本の放射線治療の問題	大西　洋	22
ワールドキャンサーデー　Close the Care Gap！を通してみえてきたこと	河原　ノリエ	23
UICC 日本委員会		24

ワールドキャンサーデー

2022年2月4日（金）　オンライン開催

新型コロナウイルスの感染拡大は、世界中にさまざまな分断をもたらし、がん医療においてはいまも多くの方々が、苦難のなかにおられると思います。感染症が人と人の繋がりを分断し、距離を

私たちに強いている中で、今年もワールドキャンサーデーを迎えることとなりました。

ワールドキャンサーデーは、2000年2月4日、パリで開催された「がんサミット」から始まったUICCの取り組みです。今年は公平性の問題を中心とした新しい3年間のキャンペーン「Close the Care Gap!」(がん医療のギャップを埋めよう)の最初の年です。UICCは、がん治療における公平性が損なわれている現状を認識し、医療へのアクセスにおいて多くの人々に存在する障壁と、これらの障壁がどのような影響を社会に与えているのかを改めて捉えなおすことを目指しています。

今年も2022年2月4日(金)のワールドキャンサーデーにオンラインで日本と世界をつなぐ「Light Up the World」を通じて日本各地を光でつなぎ、その瞬間を分かち合うことで、この苦難の中でがんに立ち向かう想いをひとつにしたいと思います。

UICC日本委員会では各加盟組織とともにワールドキャンサーデーの準備を始め、10月の日本癌治療学会でもその概要を公表させていただきました。その後、各組織にセッションを企画して頂き、また企業の方々からもご協力をいただいております。2月4日には二つのオンラインセッションと、オンデマンドでスタートするワーキンググループセッションをオンラインにて開催いたします。

いまだ、新型コロナウイルス感染症が社会の分断を加速し、がん医療においてはその狭間で多くの困難が存在している今こそ、「Close the Care Gap!」（がん医療のギャップを埋めよう）という決意を、皆さまとともに分かちあいたいと考えます。

UICC日本委員会委員長　野田哲生

UICC日本委員会委員長
野田　哲生
「UICCは世界を繋いでがんと戦います。」

厚生労働大臣
後藤　茂之
「がんの克服を目指します。」

イベント概要

❶ライトアップ点灯式（オンライン）

❷【限定配信】ワールドキャンサーデーライブセッション(要事前申込)

①がん患者が医師と治療選択を共有するためには～shared decision making～16:00～17:00

主催：UICC日本委員会／共催：一般社団法人がん医療の今を共有する会(ACT)

男性の三人に二人、女性の二人に一人ががんになる現代の日本にあっても、がんと診断されてうろたえない人はほとんどいません。がんと診断された患者が、医師と治療選択を共有し、医療者の支えのもとに納得して治療に向き合えるにはどうしたらいいのか。がん治療の専門家とがん患者が、ディスカッション。

②コロナ渦の受診控え～病院に行くのをためらっているあなたへ～19:00～20:10

主催：UICC日本委員会／共催：MSD株式会社

コロナ渦による受診・検診控えにより、以前よりもがんが進行した状態で発見されるがん患者さんが大幅に増加することが懸念されています。

❸ワールドキャンサーデーセッション

UICC日本委員会加盟組織によるセッション(オンデマンド配信)

uicc-Japan Japan National Committee for UICC

国際対がん連合
Unio Internationalis Contra Cancrum
Union for International Cancer Control

UICC-ARO UICC ASIA REGIONAL OFFICE

WORLD CANCER DAY Feb 4th

uicc global cancer control

ワールドキャンサーデー

ライトアップ ザ ワールド

オンライン開催 YouTubeにてライブ配信
https://worldcancerday.jp/

2022年2月4日(金)17:30〜18:20

ワールドキャンサーデーは世界中の人々が、がんのためにできることを考えて行動を起こす日です。UICC日本委員会ではオンラインで、ライトアップ点灯式とワールドキャンサーデー・セッションを加盟組織で共同開催いたします。2月4日の夜空をブルーとオレンジの光に包むライトアップが、世界各地で行われます。コロナ禍で、人と人の距離を離さなければならないいま、距離を超えて、日本各地の光を繋ぎ、未来にむけてがんという病への想いをひとつにする瞬間をともに分かち合いましょう。

ライトアップ点灯式
—未来に光を繋ぐ—
Close the care gap

日本各地のライトアップの点灯式をおこない、日本国内のみならず世界にむけて、がんに立ち向かう想いを発信します。

野田哲生
UICC日本委員会委員長
（がん研究会がん研究所所長）

中釜　斉
UICC日本委員会幹事
（国立がん研究センター理事長）

垣添忠生
UICC日本委員会幹事
（日本対がん協会会長）

河原ノリエ
UICC日本委員会広報委員長
（東京大学東洋文化研究所特任准教授）

ゲスト:大竹しのぶ さん

ワールドキャンサーデー・セッション Close the Care Gap

ワールドキャンサーデー当日は、【2月4日限定配信の2つのライブセッション（要事前申込）】と【UICC日本委員会加盟組織によるセッション（※オンデマンド配信）】を配信いたします。
各セッションの詳細はワールドキャンサーデー特設サイト（https://worldcancerday.jp/）をご確認ください。

ワールドキャンサーデー特設サイト QRコード

主催 UICC日本委員会
www.jfcr.or.jp/UICC

World Cancer Day 4 February

Close the care gap

国際がん連合（UICC）日本委員会主催

ワールドキャンサーデー2022

2022年2月4日金 限定配信

参加費無料 要事前申込 QRコードからお申し込みください。

ワールドキャンサーデーライブセッション開催

ワールドキャンサーデーは、毎年2月4日に、一人ひとりが、がんに関する意識を高め、
この病気に対して行動を起こすことを目的として、世界各地でさまざまな取り組みを行う日です。
UICCの取り組みの一つである「Light up the world」と共に、
2022年は2月4日限定配信の2つのライブセッションを開催いたします。
セッションはZoomウェビナーを用いて開催いたします。
詳細は、https://www.worldcancerday.jpをご覧ください。

ライブセッション❶

がん患者が医師と治療選択を共有するためには
~shared decision making~

- 開催日時：2022年2月4日(金)16:00〜17:00
- 開催形態：Zoomウェビナー（要事前申込/無料）
- 主　　催：UICC日本委員会
- 共　　催：一般社団法人がん医療の今を共有する会（ACT）

お申し込みはこちらから

男性の三人に二人、女性の二人に一人ががんになる現代の日本にあっても、がんと診断されてうろたえない人はほとんどいません。がんと診断された患者が、医師と治療選択を共有し、医療者の支えのもとに納得して治療に向き合えるにはどうしたらいいのか。がん治療の専門家とがん患者が、ディスカッションを行います。

司会：垣添 忠生　UICC日本委員会幹事・日本対がん協会会長
国立がん研究センター名誉総長
（公財）医用原子力技術研究振興財団理事長

趣旨説明　垣添 忠生

話題提供.1　「がん患者の医療選択」を考える
金田 信一郎（作家・ジャーナリスト・食道がん経験者）

話題提供.2　超高リスクの前立腺がんと診断されて
山口 博弥（読売新聞東京本社編集委員・前立腺がん経験者）

話題提供.3　がんの治療法選択における患者さんの意向とエビデンスの狭間
秋元 哲夫（国立がん研究センター東病院副院長・放射線治療科長）

話題提供.4　がん患者の治療説明・治療選択共有コミュニケーションのポイント
渡邊 雅之（がん研有明病院副院長・食道外科部長）

ディスカッション　がん患者が医師と治療選択を共有するためには
~shared decision making~

ライブセッション❷

コロナ渦の受診控え
〜病院に行くのをためらっているあなたへ〜

- 開催日時：2022年2月4日(金)19:00〜20:10
- 開催形態：Zoomウェビナー（要事前申込/無料）
- 主　　催：UICC日本委員会
- 共　　催：MSD株式会社

お申し込みはこちらから

コロナ渦による受診・検診控えにより、以前よりもがんが進行した状態で発見されるがん患者さんが大幅に増加することが懸念されています。ワールドキャンサーデーという日に改めてこの問題を専門家と一緒に考え、検診控えや受診控えをしない、させないことを目指しましょう。

司会：野田 哲生　UICC日本委員会委員長・がん研究会がん研究所所長

開会挨拶　野田 哲生

講演.1　データで読み解く受診・検診控えによる日本のがん医療への影響（質疑有）
中釜 斉（UICC日本委員会幹事・国立がん研究センター理事長）

講演.2　コロナ禍で検診・受診を妨げているものは何か
一患者さんの目線から（質疑有）
垣添 忠生（UICC日本委員会幹事・日本対がん協会会長）

講演.3　受診・検診をためらわないで—医療現場から皆さまにお伝えしたいこと（質疑有）
佐野 武（UICC日本委員会TNM委員会委員長・がん研究会有明病院院長）

クロージング　野田 哲生

UICC日本委員会加盟組織によるセッション動画をオンデマンド配信いたします。
詳細はワールドキャンサーデー特設サイトをご覧ください。
配信日時：2022年2月4日(金)20：20より配信
※2月4日当日限定配信する2つのライブセッションとは異なるセッションです。

【本件に関するお問い合わせ】E-mail wcd0204＠ellesnet.co.jp

ライトアップ ザ ワールド

―未来に光を繋ぐ― Close the care gap

ライトアップ点灯式

開催期間：2022年2月4日(金) 17:30～18:20【ライトアップ点灯時刻:18:00】
ライトアップ会場：全国15カ所
配信形態：ワールドキャンサーデー特設サイトにて配信(YouTube Live)
サイトURL 【https://www.worldcancerday.jp】
YouTubeライブ配信URL【https://www.youtube.com/watch?v=ffa-LQSwdWA】
主　　催：UICC日本委員会

登壇者：

野田　哲生
(UICC日本委員会委員長・がん研究会がん研究所所長)

中釜　　斉
(UICC日本委員会幹事・国立がん研究センター理事長)

垣添　忠生
(UICC日本委員会幹事・日本対がん協会会長)

司会進行：

河原ノリエ
(UICC日本委員会広報委員長・東京大学特任准教授

★ゲスト出演を予定していた大竹しのぶさんは、新型コロナウイルス感染症の濃厚接触者にあたる可能性が生じたため、出演を辞退されました。
当日は、メッセージが代読されました。

2月4日当日視聴数450名

ライトアップ会場よりコメント

新田八朗さん
富山県知事

土岐祐一郎さん
一般社団法人日本癌治療学会
理事長

佐谷秀行さん
一般社団法人日本癌学会
理事長

澤田守男さん
医療法人財団足立病院院長

点灯式会場・協力団体

【1】さっぽろテレビ塔【北海道】
協力：東札幌病院、ピンクリボンin SAPPORO
【2】仙台スカイキャンドル【宮城】
協力：宮城県立がんセンター
【3】新潟日報メディアシップ【新潟】
協力：新潟県立がんセンター
【4】世界遺産相倉合掌造り集落【富山】
協力：アジアがんフォーラム、がん研究振興財団
【5】埼玉スタジアム2002【埼玉】
協力：埼玉県立がんセンター
【6】さいたまスーパーアリーナ【埼玉】
協力：埼玉県立がんセンター
【7】東京ビッグサイト【東京】
協力：がん研究会
【8】大船観音【神奈川】
協力：神奈川県立がんセンター、ピンクリボンかながわ、大船観音寺
【9】岐阜市役所【岐阜】
協力：日本癌治療学会、岐阜大学
【10】中部電力MIRAI TOWER (旧・名古屋テレビ塔)【愛知】
協力：愛知県がんセンター
【11】三重大学医学部附属病院【三重】
協力：三重大学
【12】京都タワー【京都】
協力：足立病院
【13】松江赤十字病院【島根】
協力：松江赤十字病院
【14】さんいん中央テレビ鉄塔【島根】
協力：松江赤十字病院
【15】博多ポートタワー【福岡】
協力：九州がんセンター

2月4日限定配信 ライブセッション

ライブセッション①

がん患者が医師と治療選択を共有するためには～shared decision making～

開催日時：2022年2月4日(金)16:00～17:00
開催形態：Zoomウェビナー(要事前申込/無料)
主　　催：UICC日本委員会
共　　催：一般社団法人がん医療の今を共有する会(ACT)

司　会：垣添　忠生（UICC日本委員会幹事、日本対がん協会会長、国立がん研究センター名誉総長、(公財)医用原子力技術研究振興財団理事長）

・趣旨説明　16:00～16:05 垣添　忠生
・話題提供1　16:05～16:15
「がん患者の医療選択」を考える
金田信一郎（作家・ジャーナリスト・食道がん経験者）
・話題提供2　16:15～16:25
超高リスクの前立腺がんと診断されて
山口　博弥（読売新聞東京本社編集委員・前立腺がん経験者）
・話題提供3　16:25～16:30
がんの治療法選択における患者さんの意向とエビデンスの狭間
秋元哲夫（国立がん研究センター東病院副院長・放射線治療科長）
・話題提供4　16:30～16:35
がん患者の治療説明・治療選択共有コミュニケーションのポイント
渡邊　雅之（がん研有明病院副院長・食道外科部長）
・ディスカッション　16:35～17:00
テーマ「がん患者が医師と治療選択を共有するためには～shared decision making～」

視聴申込：663名　当日視聴者：583名

ライブセッション②

コロナ禍の受診控え～病院に行くのをためらっているあなたへ～

開催日時：2022年2月4日(金)19:00～20:10
開催形態：Zoomウェビナー(要事前申込/無料)
主　　催：UICC日本委員会
共　　催：MSD株式会社

司　会：野田　哲生(UICC日本委員会委員長・がん研究会がん研究所所長)

・開会挨拶　19:00～19:05
野田　哲生(UICC日本委員会委員長・がん研究会がん研究所所長)
・講演1　19:05～19:25
データで読み解く受診・検診控えによる日本のがん医療への影響（質疑有）
中釜　　斉(UICC日本委員会幹事・国立がん研究センター理事長)
・講演2　19:25～19:45
コロナ禍で検診・受診を妨げているものは何か―患者さんの目線から（質疑有）
垣添　忠生(UICC日本委員会幹事・日本対がん協会会長)
・講演3　19:45～20:05
受診・検診をためらわないで―医療現場から皆さまにお伝えしたいこと（質疑有）
佐野　　武(UICC日本委員会TNM委員会委員長・がん研究会有明病院院長)
・クロージング　20:05～20:10
野田　哲生(UICC日本委員会委員長・がん研究会がん研究所所長)

視聴申込: 358名　当日視聴者:240名

共催・協賛くださった企業・団体

ライブセッション共催
- 一般社団法人がん医療の今を共有する会(ACT)
- MSD株式会社

バナー広告協賛
- 中外製薬株式会社
- アストラゼネカ株式会社
- 武田薬品工業株式会社
- ファイザー株式会社
- ブリストル・マイヤーズスクイブ株式会社

共催

協賛

オンデマンド配信 ワールドキャンサーデー・セッション

Close the care gap（がん医療のギャップを埋めよう）

セッション ❶

新型コロナウイルス感染症とがん診療　コロナ禍のがん対策～どのように考え、行動すべきか～

佐藤　信昭 新潟県立がんセンター新潟病院院長
田中　洋史 新潟県立がんセンター新潟病院副院長
小山　和子 新潟県立がんセンター新潟病院感染管理認定看護師
廣瀬　貴之 新潟県立がんセンター新潟病院内科部長
長﨑　揚子 新潟県立がんセンター新潟病院がん看護専門看護師
本間　英之 新潟県立がんセンター新潟病院緩和ケア内科部長
中川　　悟 新潟県立がんセンター新潟病院臨床部長兼がんゲノム医療センター長

セッション❷

チームでとりくむ高齢者のがん診療

藤　也寸志 国立病院機構九州がんセンター院長
北川　善子 国立病院機構九州がんセンターがん看護専門看護師
西嶋　智洋 国立病院機構九州がんセンター老年腫瘍科医師
根岸　孝仁 国立病院機構九州がんセンター泌尿器科・後腹膜腫瘍科医長
原　　千里 国立病院機構九州がんセンター副看護師長

セッション❸

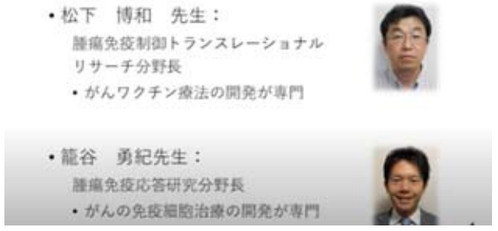
「Close the Care Gap!」誰一人取り残さないがん医療を目指す北海道のピンクリボン活動

大村　東生 ピンクリボンin SAPPORO代表/東札幌病院ブレストケアセンター長
堺　なおこ ピンクリボンin SAPPORO 理事/フリーアナウンサー
柴田　直美 ピンクリボン・ディスカバ代表
高橋　美穂 乳房再建体験者によるピアサポート倶楽部re-breast 代表
永井都穂美 ピンクリング北海道ブランチ代表

セッション❹

免疫療法の開発でがんに挑む

井本　逸勢 愛知県がんセンター研究所長
松下　博和 愛知県がんセンター腫瘍免疫制御トランスレーショナルリサーチ分野長
籠谷　勇紀 愛知県がんセンター腫瘍免疫応答研究分野長



セッション❺

医療均霑化のための病理の役割

神田　浩明 埼玉県立がんセンター病理診断科科長兼部長
堀井　理絵 埼玉県立がんセンター病理診断科副部長
元井　紀子 埼玉県立がんセンター病理診断科副部長

セッション❻

がん患者を支える

松浦　成昭 大阪国際がんセンター総長
宮代　勲　大阪国際がんセンターがん対策センター所長
池山　晴人 大阪国際がんセンターがん相談支援センターセンター長
笹田　友恵 NPO法人つながりひろば理事長

セッション❼

ワールドキャンサーデー2022　岐阜大学医学部附属病院セッションーClose the Care Gapー

吉田　和弘 岐阜大学医学部附属病院病院長
森重健一郎 岐阜大学医学部附属病院がんセンター長・産婦人科教授
二村　　学 岐阜大学医学部附属病院がんセンター副センター長・乳腺外科長
牧山　明資 岐阜大学医学部附属病院がんセンター副センター長
宮崎　龍彦 岐阜大学医学部附属病院病理部病理診断科教授・病理診断科長
鈴木　昭夫 岐阜大学医学部附属病院薬剤部長
苅谷　三月 岐阜大学医学部附属病院緩和ケアセンターGM・がん看護専門看護師

セッション❽

UHCの観点から見た日本の放射線治療の問題

野田　哲生 UICC日本委員会委員長
がん研究会研究所所長
茂松　直之 日本放射線腫瘍学会理事長
慶應義塾大学教授
大西　　洋 日本放射線腫瘍学会理事
山梨大学教授
成田幸太郎 厚生労働省がん対策疾病課課長補佐
湯川　芳郎 厚生労働省がん対策疾病課
がん医療専門官
河原ノリエ　東京大学東洋文化研究所特任准教授
一般社団法人アジアがんフォーラム代表理事
加瀬　郁子 国立がん研究センター特任研究員
一般社団法人アジアがんフォーラム

セッション❾

悪液質治療をがん治療医の道具箱に入れるには

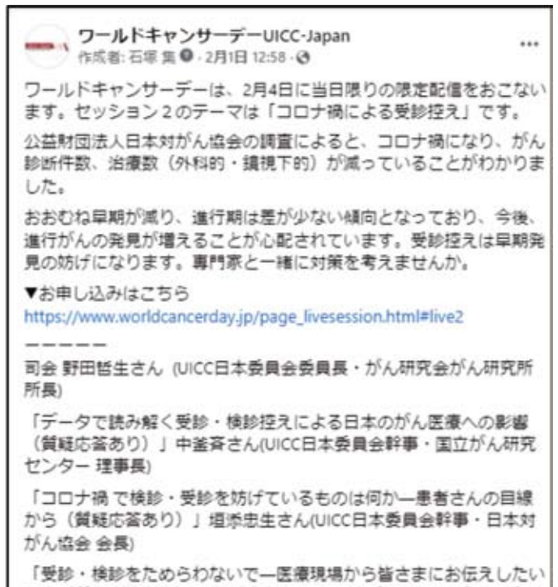
土岐祐一郎 日本癌治療学会理事長
大阪大学教授
高山　浩一 京都府立医科大学教授
室　　圭 愛知県がんセンター中央病院副院長
坂野　哲平 株式会社アルム代表取締役社長
大割　慶一 KPMGヘルスケアジャパン代表取締役社長
河原ノリエ　東京大学東洋文化研究所特任准教授
一般社団法人アジアがんフォーラム代表理事

事前告知

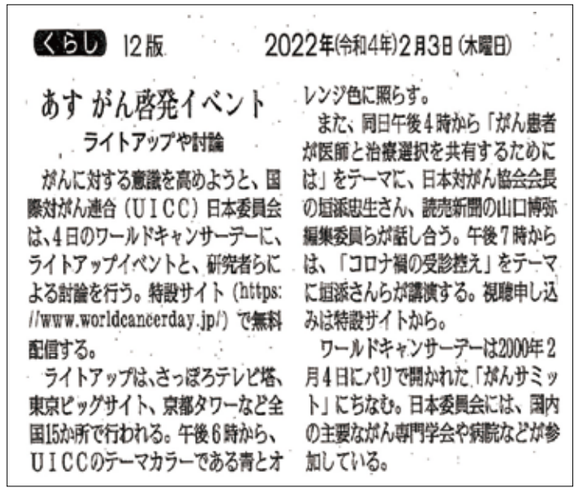
一部掲載

特設サイト

公式SNS:Facebook



公式SNS:Twitter



くらし 12版 2022年(令和4年)2月3日(木曜日)

あす がん啓発イベント

ライトアップや討論

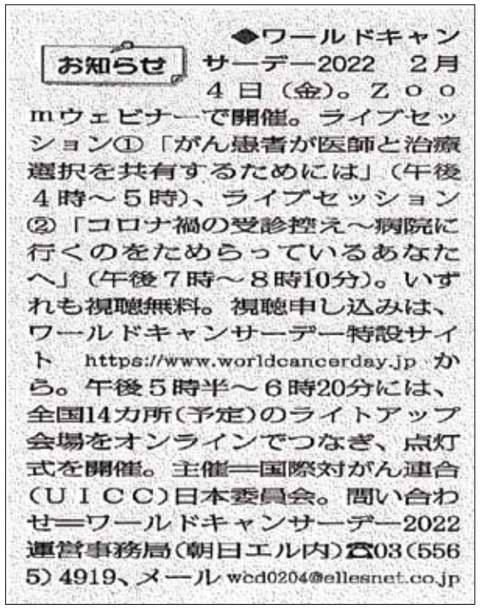
がんに対する意識を高めようと、国際対がん連合（UICC）日本委員会は、4日のワールドキャンサーデーに、ライトアップイベントと、研究者らによる討論を行う。特設サイト（https://www.worldcancerday.jp/）で無料配信する。

ライトアップは、さっぽろテレビ塔、東京ビッグサイト、京都タワーなど全国15か所で行われる。午後6時から、UICCのテーマカラーである青とオレンジ色に照らす。

また、同日午後4時から「がん患者が医師と治療選択を共有するためには」をテーマに、日本対がん協会会長の垣添忠生さん、読売新聞の山口博弥編集委員らが話し合う。午後7時からは、「コロナ禍の受診控え」をテーマに垣添さんらが講演する。視聴申し込みは特設サイトから。

ワールドキャンサーデーは2000年2月4日にパリで開かれた「がんサミット」にちなむ。日本委員会には、国内の主要ながん専門学会や病院などが参加している。

20220203読売新聞



お知らせ

◆ワールドキャンサーデー2022 2月4日（金）。Zoomウェビナーで開催。ライブセッション①「がん患者が医師と治療選択を共有するためには」（午後4時～5時）、ライブセッション②「コロナ禍の受診控え～病院に行くのをためらっているあなたへ」（午後7時～8時10分）。いずれも視聴無料。視聴申し込みは、ワールドキャンサーデー特設サイト https://www.worldcancerday.jp から。午後5時半～6時20分には、全国14カ所（予定）のライトアップ会場をオンラインでつなぎ、点灯式を開催。主催＝国際対がん連合（UICC）日本委員会。問い合わせ＝ワールドキャンサーデー2022運営事務局（朝日エル内）☎03（5565）4919、メール wcd0204@ellesnet.co.jp

20220129しんぶん赤旗

国立がん研究センター

一般社団法人がん医療の今を共有する会

大阪府

日本対がん協会

報道・事後掲載

一部掲載

2月5日朝日新聞（東京本社版） 2022/02/05朝刊

朝日新聞（西部本社版）2022/02/05朝刊

朝日新聞（大阪本社版）2022/02/05朝刊

朝日新聞（名古屋本社版）2022/02/05朝刊

UICC 世界での活動

2022 les rencontres
パリ、パレ・イエナにて開催された欧州がん会議2/3～2/4

フランス保健省保健連帯大臣オリビエ・ヴェラン
欧州がん会議にて講演

WCDのブースにて
日本委員会からのプレゼントのマスクを着用

フランスの保健連帯大臣に日本委員会かのらWCDのマスクをプレゼントした。
欧州を代表するがんセンターであるギュスターヴ・ルーシーを訪問する際にも、
着用いただいた。

IARCスタッフにもマスクを着用いただいた。

2/4 ジュネーブのUICC本部

UICC本部のLIVEセッションにおいて、
日本委員会からのプレゼントのマスクを着用

WCDの日のUICC本部スタッフ

2022年ワールドキャンサーデーに参加して

（公財）世界遺産相倉合掌造り集落保存財団　事務局長
中島　仁司

私は（公財）世界遺産相倉合掌造り集落保存財団の中島仁司と申します。私たちは富山県にある世界遺産の相倉集落を維持・保全する活動を日々行っております。

この相倉合掌造り集落というのは、集落全体が国指定史跡かつ世界文化遺産に登録されている「文化財」であるのに加え、今なお人々が住み生活を営んでいる、「人の住まう史跡」「生きた世界遺産」であるという特異な面を併せ持っています。

そして今回、そんな相倉集落へ昨年に引き続き2回目となるワールドキャンサーデーライトアップイベント参加のお話を頂きました。人の住まう集落でありますので、集落の寄合の中で区長が住民へその旨説明し、住民の話し合いの中で参加協力が決定しました。

2回目ということで、前回と違う形のライトアップにしようという積極的な意見もあり、前回と別の合掌造り家屋二棟と桜の木をライトアップ対象とすることに決まりました。

なにぶん、日本屈指の豪雪地域・五箇山の冬です。開催の2月上旬というのは、冬の間でも最も雪の多い時期で、合掌造り家屋の急こう配を落ちた屋根雪が家屋の一階部分を覆い、完全に隠してしまいます。ただライトを設置し照らせば良いというものではなく、2棟それぞれの家屋周りを除雪・排雪、数メートルの深さを持つ雪原も除雪し撮影用の場所を確保する必要があります。そのため、今回は多くの住民方の協力を得て、何とか準備と本番を乗り切ることができました。

ここで少し私の個人的なお話をしますと、実は私は10年前に結婚を機に婿としてこの相倉集落へ入った人間であります。妻と妻の祖母（以下「きよ婆ちゃん」）と私の3人家族で私の相倉での生活はスタートしたのですが、結婚後ほどなくきよ婆ちゃんの末期の胆管癌が発覚し、ツラい余生を覚悟したことを昨日のことのように覚えています。しかしきよ婆ちゃんは、それから約1年半もの間、私に畑のことや、土地のこと、雪かきのこと、地元の風習やお参り事など、この土地での生活のことをたくさん教えてくれました。そして、ツラくないわけがないのに、口を開けば周囲への感謝を口にし、気丈にして愚痴らず、いよいよ寝たきりになると、「皆のおかげで幸せな人生じゃった」と私に語ってくれました。

宣告された余命を大幅に過ぎ、お爺ちゃんのもとへ旅立たれたきよ婆ちゃん。その姿から私が学んだことは、「より良い生き方が、より良い逝き方に通じる」という事と、あとは、「癌は早期に発見し、治療すべきである」という事です。きよ婆ちゃんはすごく賢く、気丈で、しかし昔人間の気質なのか、身体に異変を感じても、病院に行かず頑なに我慢する方でした。おそらくは私が家に入る前から何かしら異変は感じていたのだろうと思います。そして、実は私の母も2018年に咽頭癌が発覚したのですが、抗がん剤と放射線治療を経て、昨年経過観測の3年目を過ぎ、今は3か月に1度の診断のみとなり、スポーツジムに通ったりと精力的な生活を戻しています。

確実ではないにしろ、癌は早期に発見し治療すれば治る可能性があります。癌は確かに恐ろしいです。ご本人はもちろん、家族もすごく不安になり、寂しい思いに襲われます。だからこそ、定期的な健診と早期治療が大事であると、3人の娘の親となった今、なおさらに強く思うのです。

コロナ禍の中、数々の交流イベントが中止となり、人と人との心が疎遠になっていく中において、癌を患い不安感にさいなまれている人たち、癌を克服しようと頑張っている人たち、癌を乗り越えた経験を持っている人たち、そんな人と人との架け橋となり得る大きな取り組みとして、このワールドキャンサーデーのライトアップイベントがあり、そのイベントの一端を担えたことに感謝します。また、このイベント遂行のため、地域で話し合い、そして協力し合えたことに、人と人が繋がることで生まれる地域の可能性、そして持続的な未来のあり方を感じました。

誰一人取り残さない医療を目指す北海道のピンクリボン

ピンクリボン in SAPPORO 事務局
割野　雄太

私たちピンクリボン in SAPPOROは主に札幌市を中心に乳がん検診の大切さを伝えるとともに患者、医療関係者、市民など、様々な方の交流の場づくりを目的に2006年より活動を行っています。当会の代表である大村東生がこのUICCワールドキャンサーデーのメンバー組織でもある東札幌病院のブレストケアセンター長ということで、昨年からLIGHT UP THE WORLD(さっぽろテレビ塔をライトアップ)に参加させていただき、今年はトークセッションも実施させていただきました。

セッションではこれまでのワールドキャンサーデーのテーマでもあった「誰一人取り残さない医療を目指す北海道のピンクリボン」として、北海道空知管内で活動しているピンクリボンディスカバの柴田直美さん、乳房再建体験者によるピアサポート倶楽部re-breastの高橋美穂さん、AYA世代の交流会ピンクリング北海道ブランチより永井都穂美さん、そして代表の大村東生、理事の堺なおこ(フリーアナウンサー)がお話させていただきました。

北海道の乳がんを取り巻く環境として全員が上げた問題はコロナ禍による不安や孤独感です。最近は患者サロンや講演会などもオンラインが主流となっていますが、やはり参加するにしてもWi-Fi環境が無かったり、家庭の事情だったりで気軽に参加できない方がいたり、また画面上では温度感がわからずになかなか仲良くなれないなど、オンラインによる新たな問題も出てきています。また病院でも入院患者さんの面会制限などで心細さや寂しさを感じている方が増えています。

誰一人取り残さないために必要なこととして、柴田さんからは「何より患者さんと主治医のコミュニケーションが大切。医師の皆様も必要な情報が載ったハンドブックを手渡してあげたり時には患者さんの背中をさすってほしい」「北海道で病院がない各地に自分から出向いて、つながる役割になれたら」とお話いただきました。

高橋さんからは「乳房再建の仕上がりや手術の雰囲気などはオンラインでは伝えづらいがSNSなどを駆使しながらピアサポーターとして今できる最大限の情報発信をしていきたい」「妊孕性や費用の問題については全国の患者会の呼びかけで新たな助成金制度もはじまり、患者を取り巻く環境も良い方向に前進している」とお話いただきました。

患者であり看護師でもある永井さんからは「手術後に自分の体が変わることに葛藤をかかえている方も多く、自分らしい生活を送るためにアピアランスケアや心のケアも考えていきたい」「自分も医療者として患者さん一人ひとりの立場を考えて接するとともに、これからも病気と立ち向かう方の癒しとなる優しい場所を作りたい」とお話いただきました。

私たちピンクリボン in SAPPOROの活動も16年目を迎え、北海道の乳がん検診受診率は少しずつ上がってきていますが、同時にピンクリボンの仲間の輪や支援の輪も広がっています。これからも北海道各地のピンクリボンチームが思いを共有して、誰一人取り残さないがん医療につながる活動を行っていきますので応援よろしくお願いします。

トークセッション

SDM (Shared Decision Making)をがん治療選択のムーヴメントに！

がん治療の今を共有する会（Alliance for Cancer Treatment: ACT）代表理事
アキュレイ株式会社　代表取締役社長
穂積　重紀

当会は、人ぞれぞれの生き方に合わせたがんの治療方法を、普通の人が医師からの情報を基に当たり前に選べる社会の実現を目指し、4年前から活動を続けている。医師が患者の生き方についてヒアリングを行い、最先端の知見も含めた治療選択の情報を提供し、患者の生活背景・人生観からの希望を聞いた上で、外科・内科・放射線治療科の医師が協力して、患者にとって最適と思われる治療提案を行い、患者の同意のもと、実際の治療を進めるためには、患者・医師の間でどんな努力が必要なのだろうか?

たまたま最初に出会った医療施設・医師によって、「標準治療」による「5年生存率」の説明だけで済まされていることはないだろうか。セカンドオピニオン受診も拒絶はされないが、申し出る心理的なハードルは高いと感じる患者も多いことだろう。医師としても、説明する労力に対して診療報酬は支払われないし、外科・内科・放射線治療科から医師が集まって、個別患者の最適治療について検討するプロセスが診療報酬の支払い条件とはなっていないので、実施のインセンティヴが働かない。

一方患者は、ただでさえ「がん宣告」でショックを受けて茫然自失しているのに、自ら治療の選択肢を調べて考えるなど、かなり限られた人にしかできない。近年、小中高の教育プログラムで「がん教育」が必須となったのは一歩前進であるが、多くのがん患者（65歳以降が85%）が自力で全ての情報を集めることが一般化する道のりは長い。巷にはインターネットや書籍で得られるがんの治療情報は山ほど溢れているが、どれが正しいのやら、何を信じていいのか、どうやって自分に合った情報に辿り着くのか、途方に暮れる患者とその家族が多いのではないだろうか。

人生100年時代となっても人は100%死を避けられないが、死に至るまでの生き方は自ら選んで変えることはできる。長生きをすれば細胞のコピーミスの頻度も上がり、今や二人に一人ががんを罹患する時代。確率論では、自分が（または愛する人が）がんに罹ることは50%避けられない。しかし、がんとわかったその日から（あるいはそうなる前からだって）「がんとどう向き合って生きるか」を考え、そのために可能ないくつかの治療の選択肢から、自分の生き方に合った治療を選び、最後まで自分らしく生きることは可能だ。日進月歩の科学技術の進歩により、優れた医療機器と医療技術が生まれ、人ゲノムが解明され、免疫のメカニズムがわかり始め、元々自己から派生したがん細胞との付き合い方について、患者と医師が話し合って治療を選択できる環境は整いつつある。実際にSDMを推進する医師や、それができることを実体験した患者が声を上げ始めている。そうした生の声こそが、人々にあらためて「がん社会」の生き方を考える上での羅針盤となることと思う。この度のWCD共催イベントでご登壇いただいた先生方、患者代表の方々はSDMの先駆者たちである。一人一人の「よく生き、よく死ぬ」ための取り組みが大きなウェーブとなり、患者が「治療選択」の協力を医師に自ら求めることが社会的なムーヴメントとなれば「山が動く」、医療制度改革の大きな力となると信じてやまない。

2022 ワールドキャンサーデーに参加して

埼玉県立がんセンター　病理診断科　科長・診療部長
神田　浩明

埼玉県立がんセンターは2022年からワールドキャンサーデーのライトアップイベントとオンデマンドセッションに参加しました。ライトアップイベントは埼玉スタジアム2002とさいたまスーパーアリーナで行いました。埼玉スタジアムはこの時期に芝の張替えを行う予定で、あらゆるイベントを断っており、当初は断られてしまいました。ところが、サッカーワールドカップ予選で日本代表がはじめのうち苦戦をしたため、2021年10月になってこの時期の予選会場が日本代表の勝率の良い埼玉スタジアムになり、芝の張替えが延期になって、ライトアップも受け入れていただきました。さいたまスーパーアリーナは他のイベントが入っているとライトアップはできないのですが、たまたまイベントがありませんでした。幸運が重なり、2つの大会場でライトアップができました。全面協力いただいた2施設の皆様に心より御礼を申し上げます。2023年はワールドカップ予選がなく、2月4日が土曜日でイベントが開かれる可能性が高く、会場探しに悩んでおりましたが、埼玉がんセンター前病院長の横田治重先生がライトアップ機材を寄付してくださり、埼玉がんセンターでできるようになりました。また、防災地下神殿として観光名所にもなっている春日部市の首都圏外郭放水路から内諾をいただいており、この2か所を予定しております。

オンデマンドセッションは当初予定したセッションがコロナの影響でできなくなり、急遽、病理診断科で”医療均霑化のための病理の役割”というプログラムを作りました。私が2016年にパリのWorld cancer congressに参加したとき、UICCが病理を取り上げていることに驚き、多くの方にそのことを伝えたいと思っておりましたが、セッションとして形にできてうれしかったです。コロナの先が見えませんのでこちらも2023年に向けて準備を始めています。

埼玉スタジアム2002

さいたまスーパーアリーナ

コロナにも寒さにも負けず ～ワールドキャンサーデー2022点灯式報告～

岐阜大学医学部附属病院　教授
宮崎　龍彦

ワールドキャンサーデー2022点灯式に今年も岐阜から参加させていただきました。今年が2回目の参加です。昨年はマーサ正木のロビーをライトアップしましたが、今年は新築なった岐阜市役所のライトアップを目玉に参加させていただきました。18階建ての新庁舎は白い外壁とガラスの多用、優しい曲線を活かした形状で岐阜の街に独特の存在感を示しています。吉田和弘院長（UICC日本委員会財務幹事）の号令のもと、点灯式イベントのパブリックビューイングと資料展示のために、岐阜市役所1F市民交流スペースミンナトをお借りして、市民の皆さんとイベントを共有しました。ちょうどコロナ第6波の影響を受け、大々的な広報は避け、活動に共鳴して下さった少数の市民の皆さんと、当院がんセンター幹部のみの会場参加となりましたが、Close the care gapというテーマに真摯に向き合い、ビデオセッションや会場に設置したポスターにより、情報発信の一翼を担えたものと考えております。当日は、降雪もあって極めて寒く、市役所前の歩道橋の上からライトアップの中継を行う手がかじかみ、もっと厚着をして作業にあたる必要があることを学習しました。しかしながら、コロナにも寒さにも負けずこのイベントを盛り上げて、啓発に繋げることへの使命感を新たにいたしました。

コロナの影響で、岐阜においてもがん検診受診者が減り、かなりがんが進行してから来院される患者様はあきらかに増えており、早期発見早期治療の取り組みは一歩後退しています。これを正常化するのは焦眉の問題であると考えます。このイベントを通して一人でも多くのみなさんに光を届けられることを願ってやみません。末筆となりましたが、ご協力いただいた岐阜市役所の皆様、岐阜市保健所健康増進課の皆様、当院医療支援課の皆様、その他関係者皆様に御礼申し上げます。

ライトアップの模様

パブリックビューイング会場

仕掛け人達　左より廣瀬看護部長、宮崎病理診断科長、森重がんセンター長、二村副がんセンター長、牧山副がんセンター長、齊藤医療支援課長

2022年ワールドキャンサーデーに参加して

国立病院機構九州がんセンター　院長
藤　也寸志

九州がんセンターは、昨年2021年に引き続き、UICCワールドキャンサーデー「Close the Care Gap！（がん医療のギャップを埋めよう）」のイベントに参加しました。世界各地をライトアップするUICCのイベント「Light　Up　the World」と連動して、日本各地のライトアップとともに、福岡市の博多ポートタワーをライトアップし、ワーキンググループセッションにも参加しました。日本全国での一斉ライトアップの午後6時は、福岡市はまだ薄暮でライトアップ瞬間のインパクトは少ないのですが、暗くなると写真のように博多港を照らすライトアップができました（図1）。

このイベントに先だち、九州がんセンターの院内の所々に「Light Up the World」のポスターを掲示しました（図2）。UICCの目標であるがんの制圧を実現するためには、限定された施設や医療従事者の活動だけでは不十分で、がんに関わる医療従事者一人ひとりが問題意識を持ち、一歩づつでも目標達成に向けて前進し続けることが求められます。九州がんセンターでも、スタッフ一丸となって貢献を続けていきたいと思います。さらに、ワールドキャンサーデーの新しいキャンペーン「Close the Care Gap！（がん医療のギャップを埋めよう）」を推進するためには、がん患者さんやご家族、全国民の理解と協力が必須であり、そのためのわかりやすい情報発信や啓発活動を行うことも私たちの使命です。

今年のワーキンググループセッションでは、「チームで取り組む高齢者のがん診療」をテーマとして、全国で初めてがん専門施設に設置した老年腫瘍科とそのチームの活動を紹介しました（図3）。今まで、医師の裁量やいわゆる勘で行われてきたエビデンスに乏しい高齢者のがん診療を、多職種からなるチームで行う取り組みです。意思決定支援の必要性も含めた高齢者総合的機能評価をベースとして、一人ひとりのがん患者に最適な、そしてがん患者やご家族も納得のいく治療法を選択できるようになるのが目的で、データの集積も確実に行いエビデンスを創出したいと思っています。

九州がんセンターでは、日本が「がん」に立ち向かう決意を世界に発信することに貢献することを自施設の使命の一つとして、UICC日本委員会の活動に参画し続けたいと考えています。今後ともよろしくお願い申し上げます。

図1　博多ポートタワー

図2　各所にポスター掲示

図3　老年腫瘍科の活動紹介

WCD2022セッション「悪液質治療をがん治療医の道具箱に入れるには」に参加して

一般社団法人アジアがんフォーラム理事
株式会社アルム　代表取締役
坂野　哲平

医療機器・医療機器プログラムのベンチャー企業の経営者として、主に救急医療や感染症対策の医療DXを医療者・行政・メーカーと取り組んできた。現在、一般社団法人アジアがんフォーラムの理事としての活動にも参画させていただいており、我々がこれまで救急医療で蓄積してきた経験をもとに癌治療分野にも、医療DXが起こせるのではと期待している。

遠隔診療アプリ「Join」を日本初の保険償還アプリとして紆余曲折の中、国内外32か国に1200の医療機関に導入したが、8年半を要した。遠隔診療だけではなく、PHRアプリ、手術ナビゲーション、トリアージアプリ、血管内治療機器、遠隔医療者教育、地域包括ケアシステム、スマートシティデータ基盤や検疫システムなどといった様々な医療関連の製品を医療者・行政と共に研究開発をし、グローバルに社会実装に繋げてきた。

今回のテーマ、がん悪液質はがんによって徐々に体が消耗していってやせ衰えていくことだが、これまではがんになったら仕方ないと思われてきたといわれている。しかし悪液質は、がんの早い段階から進行することがあり、早期に治療を始めれば患者さんがよりよい生活を送ることができるのではと考えられるようになっているとも聞く。

患者さんの状態把握で、実臨床で問題になってくるのは、体重の変化を客観的に捉えることであると今回のセッションにお招きいただきはじめて知り、我々の知見でなにができるかかんがえてみた。

アプリによる情報収集とRWDを用いることには大きな可能性があるのだが、闇雲に沢山情報をとるというより、日々の変化のなかで理解していくのが必要であり、何らかの治療が始まっている人で定期的に体重データを取り、治療の早い段階で悪液質が起きている人に治療介入することが重要であるのではないかということが、悪液質治療を専門とする先生方との、貴重なセッション打ち合わせの時間のなかから学んだことだ。

アプリには二つの形態がある。一つ目はデジタルセラピューティクス。アプリの使用そのものが治療効果を持つものであり、血中酸素濃度測定を組み合わせた禁煙アプリなどが知られている。二つ目は医師によるモニタリングツールであり、Patient Reported Outcome（PRO）を作ることができる。

PROをがんのエビデンスに入れていくことは非常に重要であり、治療行為の中にPROなどの悪液質に関わる事象を改善するための介入行為そのものに診療報酬をつけるなどの仕組みが必要である。

PROを診療行為に生かした場合の加算は認知症の症状において保険診療の仕組みに入っているため、栄養指導の加算も既にあるため、このような仕組みの利用も考えられるのではないかということを提案させていただいた。

ワールドキャンサーデーの、Close the Care Gap！という理念は、ICTの力で医療の格差・ミスマッチをなくし、全ての人に公平な医療福祉を実現することを目指して活動してきたものとして、心奮い立たせられるフレーズである。もともと医療とは全く縁のないエンタテインメントに関わるビジネスを14年やってきて異分野からの参入だったが、医療技術の高度化により、医療の専門性は深化、知識は分散しており、医師間のみならず多職種の情報連携やコラボレーションは、医療アウトカムの向上には必要不可欠な時代になっているからこそ、我々が果たせることがある気がしている。

UICCの加盟組織のひとつに、理事として参加することになったことを機会として、がん医療のUHC実現を目指して、がん領域の専門家の方々と幅広い意見交換をしていけたらと考えている。

オンデマンドセッション－UHCの観点から見た日本の放射線治療の問題

日本放射線腫瘍学会　理事
大西　洋

日本放射線腫瘍学会は、これまでUICC日本委員会に賛助会員としてご協力させていただいてきたが、このたびはじめて、UICCのワールドキャンサーデーオンデマンドセッション「UHCの観点から見た日本の放射線治療の問題」に参加させていただいた。

この経緯としては、私が主任研究者をつとめる「厚労科研：放射線療法の提供体制構築に資する研究（大西班）」において、UICC加盟組織のひとつである一般社団法人アジアがんフォーラムに参加していただいており、河原ノリエ代表理事・加瀬郁子研究員とともに、（株）バリアンメディカルシステムズの委託研究としてすすめられている提言書「Covid19時代におけるがん医療のユニバーサルヘルスカバレッジー日本における放射線治療の課題と展望」の社会実装を一緒に議論してきたことが背景にある。

私は放射線腫瘍学会の健保担当理事として、診療報酬制度を改善する活動を行っており、放射線科専門医会においても同様の理事をしている。わが国では放射線治療施設は850と潤沢な医療資源があり、健康保険制度のもとUHCの課題とは一見無縁のように思える。しかし実際は、照射装置的には実施可能であるにも関わらず、国が定める人的施設要件により高精度放射線治療であるIMRT(強度変調放射線治療)が提供できていないという矛盾に満ちた奇妙な現状が多くの放射線治療施設にあり、また国民の間ではほとんど知られていないことを大きな課題と考えてきた。それゆえ、今回のワールドキャンサーデーセッションへの参加を良い機会であったと考えている。

放射線治療はがんの三大治療の一角を担う重要な治療であるが、十分な均霑化が図れないことは世界的にUniversal Health Coverage(誰ひとり取り残さないがん医療; UHC)の最大の課題の一つである。UICCはすべてのがん患者の50%が放射線治療を受けるべきであると掲げ以前からかなり力をいれてきたと伺っている。発展途上国では国内に放射線治療施設がごくわずかしかないことや専門人材不足により適切な放射線治療を必要とする患者に提供できないという問題を抱えている。一方で、放射線治療施設が諸外国に比べても充実しているわが国において放射線治療のがん患者への実施率は30%程度と低く、また欧米では標準的な治療として行われているIMRT(強度変調放射線治療)の実施率も低く留まっており、放射線治療のUHCが達成されていない。

このセッションにおいては、放射線治療現場でのインタビューを行い、わが国の放射線治療のUHCを阻む課題とその解決策の構造が抽出されたことが発表された。その結果、実態として、IMRT普及率の低さ、適切な治療が病院経営上の理由により提供できない構造となっていること、放射線治療適用患者の取りこぼしの可能性があること、治療施設が分散していること、放射線治療医が不足していることが抽出でき、その解決法として以下のような点が挙げられた。

わが国における放射線治療のUHC達成するための課題

1. IMRT(強度変調放射線治療)施設基準における医師の人的要件の見直し
2. 遠隔医療推進のための診療報酬制度や各種仕組みの設計
3. あるべき放射線治療の活用を促すために放射線治療専門医師の意見を他科の医師の意思決定に生かす仕組みづくり
4. 医学物理士の国家資格化あるいはそれに代わりうる放射線治療関連コメディカルの制度設計のアップデート
5. 放射線治療医と専門性の高い放射線治療計画支援者の量・質の充実
6. 対がんコミュニティによる放射線治療業界への後押し
7. 医療資源の最適配分を目指した放射線治療施設の集約化と均てん化のグランドデザインの策定

このセッションは、ワールドキャンサーデーにちなんで、多くの方々に閲覧していただいた。そして、2022年10月22日に開催する日本癌治療学会UICCシンポジウム「Close the Care Gap!がん医療のGAPを埋める」においても発表の機会を得た。、厚生労働省のかたとともに、地域医療構想における第8次医療計画に向けた検討などを見据えてさらに深堀りをして議論できるのではと期待している。

また、UICCのワールドキャンサーコングレスにおいて、UICC-AROセッションとして

10月19日に「Lessons and Challenges for UHC for Radiotherapy in the Asian Region」の座長をつとめることとなり、加瀬郁子さん（がん研特任研究員）とともに登壇予定である。ぜひ、UICCの方々と、この課題を共有していきたいと考えている。

ワールドキャンサーデー　Close the Care Gap!を通してみえてきたこと

一般社団法人アジアがんフォーラム代表理事
東京大学東洋文化研究所特任准教授
河原　ノリエ

ワールドキャンサーデーは3年間のテーマとして「Close the Care Gap!（がん医療のGAPを埋めよう）」をスタートさせました。こうした流れに先立ち、UICC-AROは赤座英之先生とともにがん医療において既存の社会の構造的課題と医療格差について提唱し続けてきました。赤座先生は、がん医療のUHC構築をUICC―AROで議論する際、途上国においてUHC適応範囲を広げていかねばならない財源拡張型のベクトルと、医療財政逼迫のなか対応を迫られている先進国の財源縮小型のベクトルの両者の政策を並べて考えることをされてきました。どちらにおいてもそれぞれの社会における不平等に沿う形で、がんリスクも、診断・治療へのアクセス障壁も存在しており、その対応の差による結果を丁寧にみていくことが世界全体のがん医療の底上げに繋がるという考えに基づくものです。

日本においては、国民皆保険制度とがん医療の均てん化政策という言葉のイメージが強く、日本国内のがん医療のGAPという視点はあまり、取りあげられてきませんでした。しかしながら、治療技術の進歩により死病ではなくなったがんを抱えて生きてゆく人たちが、地域コミュニティに急増しながらも、少子高齢化、人口減少、医療高騰により医療財政悪化など構造的な課題が逼迫しており、持続可能な地域経営のためにも、がん医療の地域格差について現実をみつめて考えるべきときがきています。

UICC日本委員会は、ワールドキャンサーデーを、加盟組織を中心として全国の方々に、がんに関する意識を高めるUICC活動を理解していただく貴重な機会ととらえ、取り組んできました。特に、それぞれの地域に根差したライトアップ活動をお願いしていることから、運営のやりとりをきっかけに、お話をする機会がふえ、学会や中央の審議会などからは窺い知ることができないそれぞれの実情なども教えていただくことができました。また、広報活動を通じ、ローカル放送、地方誌など、それぞれの地域が抱える課題を的確に抽出する役割を担っている方々との繋がりは、UICC-ARO活動としてアジアのUHC政策研究を行ってきたものとして、新たな気づきを得ることができました。あらためて現場は様々な利害をもつ人が集まる場所であり、深刻な課題解決においては、その場で頑張ってこられた方の抵抗もでてくるというアジアの開発事業と通底する側面があります。がん医療のUHC政策においては、日本の地方の課題も、アジアの課題も共有する構造的な課題があることをあらためて学ばせていただく機会となりました。

今後日本は、人口減少・少子高齢化が進み、それがより早く進行している地方においては、行政運営や社会活動など多方面において課題を抱えることとなります。とりわけがん医療の地域格差の問題は顕在化してくるといわれ、地域医療の持続的確保に向けがん拠点病院の在り方や地域医療構想の改定を見据えた議論が始まろうとしています。

それぞれの地域により、課題の在り方は様々かもしれませんが、「Close the Care Gap!」を旗印とし、ワールドキャンサーデーというひとつのイメージを共有できる装置によって、持続可能ながん医療の在り方と、その実現を目指す官民の機運の醸成に結び付くのではと期待しています。これこそがUICCという組織が1933年から、民間という立場を貫きながら、がん医療をよりよくするという理念のもと、様々な立場の方たちとの繋がりの場を提供しようとしてきた先人たちの願いではないでしょうか。それぞれの地域でがん医療のたゆまぬ積み重ねをされてこられた方々と、先人の努力を語り合いながらライトアップイベントなどを通じて繋がっていくことに大きな意義を感じております。

UICC 日本委員会加盟組織

愛知県がんセンター	(一社)アジアがんフォーラム	大阪国際がんセンター
神奈川県立がんセンター	がん・感染症センター都立駒込病院	(公財)がん研究会
(公財)がん研究振興財団	(公財)がん集学的治療研究財団	九州がんセンター
国立がん研究センター	埼玉県立がんセンター	(公財)佐々木研究所
(公財)札幌がんセミナー	静岡県立静岡がんセンター	(一社)全国がん患者団体連合会
(公財)高松宮妃癌研究基金	千葉県がんセンター	東京慈恵会医科大学
栃木県立がんセンター	新潟県立がんセンター	(一社)日本癌学会
(一社)日本癌治療学会	(公財)日本対がん協会	(一社)日本乳癌学会
(特非)日本肺癌学会	(公社)日本婦人科腫瘍学会	東札幌病院
(公財)北海道対がん協会	三重大学医学部附属病院	宮城県がんセンター

賛助会員　協和キリン株式会社(山極ー吉田国際奨学金)
(公社)日本放射線腫瘍学会

UICC日本委員会　2022年役員

委員長　野田　哲生(がん研究会)

幹　事
- 総　務　中釜　斉(国立がん研究センター)
- 学　術　垣添　忠生(日本対がん協会)
- 財　務　吉田　和弘(岐阜大学大学院医学系研究科)
- ARO担当　野田　哲生(がん研究会)
- 予防・疫学領域担当　浜島　信之(葵鐘会/名古屋大学)
- 事務局担当　大野　真司(がん研究会有明病院)

監　事　増井　徹(慶応大学医学部)
池田　徳彦(東京医科大学)

専門委員会委員長
- 疫学予防委員会　浜島　信之(葵鐘会/名古屋大学)
- 喫煙対策委員会　望月友美子(新町クリニック)
- 患者支援委員会　土岐祐一郎(大阪大学医学部)
- TNM委員会　佐野　武(がん研究会有明病院)
- 広報委員会　河原 ノリエ(東京大学東洋文化研究所)
- 小児がん委員会　中川原　章(佐賀国際重粒子線がん治療財団)
- 対がん協会　石田　一郎(日本対がん協会)

UICC-AsiaRegionalOffice(ARO)
野田　哲生(がん研究会)

UICC 本部
- Fellowship 委員　中釜　斉(国立がん研究センター)
- TNM 委員　浅村　尚生(慶応大学医学部)

名誉会員
- 青木　國雄(元愛知県がんセンター)
- 富永　祐民(元愛知県がんセンター)
- 大島　明(元大阪府立成人病センター)
- 武藤徹一郎(がん研究会)
- 北川　知行(がん研究会)
- 田島　和雄(元愛知県がんセンター、三重大学)

日本委員会事務局(がん研究会内)
- 神田　浩明(研究:幹事会担当)(埼玉県立がんセンター)
- 関本　敏之(事務:委員長業務補佐)

2023 年度の UICC 日本委員会総会は
7 月 22 日(土)　12:00 ～ 14:30　経団連会館
(Web 開催の場合　13:00 ～予定)

UICCホームページ　:　www.uicc.org
UICC日本委員会ホームページ　:　www.jfcr.or.jp/UICC
UICC-AROホームページ　:　http://uicc-aro.org/